

吉祥寺と井の頭公園から生まれたフリーペーパー

PARKS

パークス

ご自由にお持ち帰りください。

暑いですね。
vol,2

じかん／ばしょ／ひと

石橋静河・インタビュー

吉祥寺だけが住みたい街でした マキヒロチ

IN CINEMA, IN KICHIJOJI 井手健介

吉祥寺の裏方たち——MANDA-LA2店長・中野直志インタビュー

映画をつくっています。



映画を
つくってます!

吉祥寺と井の頭公園から生まれた映画

PARKS パークス

第1弾キャスト発表、
そしてサントラ参加メンバーも!
メインキャストの発表は11月!!!



『PARKS パークス』メイキング写真、井の頭公園にて。写真:数下晋太

撮影も無事終わり、映画『PARKS パークス』はただいま編集・ダビング作業真っ最中。いよいよ仕上げの段階です。苦勞して撮影した多くのシーンですが、それらを全部使うわけにはいきません。残るのはほんの一部。映画作りは残酷です。使われなかった山のように多くのショットの上に、ひとつの映画が出来上がります。

そしていよいよキャストの発表です。とはいえ今回は3名の主役俳優ではなく、その脇を固める方たちを。まずは吉祥寺にゆかりのある石橋静河さん。折しも初主演作『夜空はいつでも最高密度の青色だ』の9月クランクインが発表されたばかり。今号では吉祥寺インタビューにも登場していただいていますので、詳細はこちらを。そして森岡龍さん。主演作『エミアビのはじまりとはじまり』が9月3日に公開を控える森岡さんは、自身の監督作もある映画好きで、もちろん吉祥寺バウスシアターにも通っていたとのこと。おふたりが演ずるのは、

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ 2017年4月 テアトル新宿他にて全国公開

製作:本田プロモーション BAUS 製作プロダクション:オフィス・シロウズ
配給:boid 宣伝:VALERIA、マーメイドフィルム

父や祖母が60年代に残した1本のオープンリールテープ。そこに収録された未完成の音楽が、若者たちの手によって半世紀後に蘇る。それはかつてあった音楽でもあり今ここにある音楽でもあり、来るべき未来の音楽でもある。吉祥寺と井の頭公園を舞台に、あらゆる時代に鳴り響く音楽を、現在の若者たちとかつての若者たちが作り上げる、音楽青春映画。



主人公たちの祖母、父の若き日。ふたりのデュエットも聴くことができます。

そしてもうひとり、吉祥寺といえば佐野史郎さんを欠かすわけにはいきません。主人公に貴重な提案を行う大学教授の役。音楽好きでも知られている佐野さんですが、映画の中の教授の研究室には当たり前のようにギターがあり、見事なギターの腕前を披露していただきました。短い出演時間ですが、忘れがたい印象を残すはず。



また『PARKS パークス』には、多くのミュージシャンの方たちがこの映画のために楽曲を提供、そして出演もしていただきました。主人公たちのバンドメンバーとして、ハウスシアターの社員でもあった井手健介(ギター)さん、THE NOVEMBERSのドラマーの吉木諒祐さん、「真黒毛ぼっくす」の池上加奈恵(ベース)さん、そして「森は生きている」のキーボードの谷口雄さん。それからフェスのライブシーンで演奏を行



うのはシャムキャッツ。井の頭公園で路上演奏をするのは「スカート」の澤部渡さん。いずれも吉祥寺ゆかりのミュージシャンの方々です。その他、思わぬカメオ出演者もあり。さまざまな人たちが集まる公園が、映画の中にも広がっています。そんな公園の中からどんな音が聞こえてくるか、完成は秋の予定です。そしてメインキャストの発表は11月になります。こちらもお楽しみに。



写真: 数下雷太



じかん
ばしょ
ひと

No.02

いちばん

好きなのは、

やつぱり公園

石橋静河

インタビュ

今回、映画『PARKS パークス』の出演が発表された石橋静河さん。もともと映画の舞台である吉祥寺にとっても愛着を感じていたとのこと。今まで吉祥寺で過ごした時間、映画の役柄を引き受けるなかで改めて感じた吉祥寺の魅力について、石橋さんもお気に入りという「コロモチャヤ」でゆっくりとお話を伺いました。

——吉祥寺はよく知る町だそうですね。

はい。とても愛着がある町です。私は4歳のころからクラシックバレエを始めて、15歳からアメリカのバレエ学校に2年、カナダに2年留学して、19歳までの4年間は海外にいたんですけど、学校が休みになり帰国するときは、いつも吉祥寺の景色をみてほっとしていましたね。

——吉祥寺でとくに好きな場所は？

いちばん好きなのは、やっぱり公園です。とくに池の周辺かな。昔からよく歩いていました。街のがやがやした喧噪を離れて一歩、公園に足を踏み入れると、急に静かになって、心が落ち着くんです。好きなお店もたくさんありますが、3年前にオープンしてからはここ(取材場所の「コロモチャヤ」)がいちばんのお気に入り。あと、南口の「ゆりあべむべる」も大好きな喫茶店です。最近吉祥寺も、大きな電機屋さんとか、チェーン店や量販店が増えて、とても便利になりましたよね。でも、オーナーの人柄がにじみ出るような個人商店が少なくなってきたのは、ちょっとさみしい気がします。古い吉祥寺の空気感も残してほしいですね。バウスシアターが閉鎖してしまったときもショックでした。子どものころから時々、映画を観に行っていて、吉祥寺らしい映画館だなあと思っていたので。もっとバウスでたくさん映画を観ておけばよかったなと後悔しているんです。「バウス2」ができればいいのに。



——吉祥寺にまつわる印象的なエピソードを教えてください。

以前、井の頭公園の入り口にあった、「ドナテロ(ドナテロウズ)」というアイスクリーム屋さんに、子どものころよく行っていました。猫がいっぱい居てとても雰囲気のあるお店で。床一面の黒と白のチェックの柄がすごく印象的で、そうした柄を見かけると今でもかならずドナテロを思い出します(笑)。3色、アイスを選べたんですが「一番最初に注文したアイスが、ほかの二色よりも沢山入っているんだ!」って兄や姉と当時よく話していました(笑)。お客さんたちも、そこに過ごす猫たちとおなじように、それぞれが好きなように自由な時間を過ごしていて、子どもながらに「素敵だなあ」と感じていました。



——当時と比べると、街の雰囲気は変わりました？

変わりましたね。古くから吉祥寺に住んでいる方に「昔はこのあたりは森だったんだよ」と聞いたことがあります。私はさすがに、その時代は知らないんですけど、子どもころの吉祥寺は、もう少しのどかな街だったような気がします。

——もっと都心のほうが便利だなとは思わない？

それが、思わないんです(笑)。もともと、都会的すぎる場所があまり好きではないからかもしれません。都会なのに、どこかのどかな空気が流れていて、そのふたつのバランスがとれているのがこの街のよさなんですよ。表参道とかは個人的にちょっと緊張しちゃいます(笑)。

——吉祥寺が舞台の映画『PARKS パークス』にキャストिंगされたのは偶然だったんですか？

まったくの偶然なんです。本当に不思議で、『PARKS パークス』は、初めてちゃんとした役をもらった映画だったんですけど、自分にとって特別な町である吉祥寺、それも井の頭公園が主な舞台だった。そのせいか、不安も大きかったけど、しみじみ気持ちのほう为上回っていましたね。実際、撮影が始まって、私は現場の経験もまだそれほどないからもっと緊張するかなと

思っていたのに、よく知る風景だから、本当に楽しくて。その場所を知っていると、お芝居をするときに有利なんですね。それは大きな発見でした。今回、撮影に入る前に、吉祥寺についていろいろ考えてみたんです。それまでは日常の場所というか、生活のなかにある場所というだけだったんですけど、客観的に見る機会をもらったわけですね。そしてあらためて「いい場所だなあ」と。

——ロケした場所は公園だけですか？

もう一か所、公園の池のそばの古いアパートでも撮影しました。『PARKS パークス』はいろんな時代に吉祥寺にいた人たちの人生が交錯する映画なんですけど、私が演じたのは60年代の佐知子という女の子で、恋人と一緒に音楽を作っている設定なんです。彼女が劇中で歌う歌が、今回は軸になってくれた気がします。私自身、歌うのは好きで、レッスンにも時々行っているんですけど、歌いながら、「こういう曲を作って歌うキャラクターはどういう女性なんだろう」と想像する手がかりになったり。監督の瀬田なつきさんの演出もおもしろかったです。ひとつひとつ細かく指示するのではなく、「こんな感じでやってみてください」とぼいっと役者に投げるんですね。もちろんダメ出

しもされますけど、かなり自由にやらせてもらえました。全部で10日くらいの撮影でしたが、終わっちゃうのが惜しいような、リラックスした、いい雰囲気の世界でした。

——自分の出演場面はもう見ましたか？

ええ。編集が終わっていないので、まだ公園の場面をちょこっと見ただけですけど、色彩がとてもきれいで、実際に公園にいて、5月の気持のいい風に触れているような気持ちになりました。完成が本当に楽しみです。



「PARKS パークス」メイキング写真

——撮影現場は人ばかりで大変だったのでは？

少なくとも私の出番のときは、それほどでもありませんでした。吉祥寺はおだやかな人が多いのか(笑)、「ああ、なんか撮影やってるんだ、へえ…」と、やさしく見守ってくれている感じで。おじいさんが「いいねえ」とつぶやきながら、しばらくそばに立って眺めていたりして。人がどこかのんびりとしている感じがありますよね、吉祥寺って。

——井の頭公園は、普段着の気楽な雰囲気、いろんな人が歩いていますよね。

撮影しながら公園に行く人たちを見ていて、いま歩いているおじいちゃん、おばあちゃんにも若いころがあって、60年代には佐知子みたいだったんだろうなあ、と思ったんです。いろんな人たちの人生が、ずっと続いている場所なんだと。昔の写真も見せてもらったんですけど、公園をそういう視点で見ると感慨深いです。自分もおばあちゃんになったとき、ここを歩いているかもしれない。普段の忙しい生活から離れて深呼吸して、そんなことを考えられる場所でもあるんですね。だからこそ、こういう場所をこれからも大切にしていかなければと思います。

取材：松浦泉／ヘアメイク：有路涼子／写真：マチェイ・コモロフスキ



石橋静河(いしばし・しずか) | 1994年東京生まれ。4歳からクラシックバレエをはじめ、2009年から2011年、米・ボストン、カナダ・カルガリーにダンス留学する。2013年、帰国し本格的にコンテンポラリーダンサーとして活動をはじめ。次第に演技への関心も芽生え、2015年9月に舞台「銀河鉄道の夜」で主演デビュー。2016年早春にはNODA MAPの「逆鱗」にも出演。今春からは「ポカリスウェットイオンウォーター」や「イオン・トップバリュ・ギリシャヨーグルト」などのTVCMでも清楚な魅力を発揮。今後も映画公開・出演を控えてこれからのが楽しみな、注目の新人女優。

お店紹介

coromo-cya-ya

コロモチャヤ



coromo-cya-ya

OPEN 11:00-19:00

CLOSE 火曜日

武蔵野市吉祥寺南町1-8-11 弥生ビル2F

TEL 0422-26-5889



「衣」と「食」～身近なものを大切にする気持ちで～

今回、石橋さんの取材に使わせて頂いた場所は、井の頭公園から徒歩1分。お洋服屋兼、カフェスペースのcoromo-cya-ya(コロモチャヤ)です。

2013年にオープンしたこのお店ですが、吉祥寺にお店を出すと決めるまでには、いくつか候補になっていた街もあったそう。でも、お店のイメージを一番共感し、理解と一緒に育ててくれるのではないかと思ったのが吉祥寺だったとのこと。

洋服をみるのに疲れたら、ちょっとカフェで一休み、なんて使い方が理想的ですね。実は、石橋さんが着ているお洋服も、お店で取り扱っているものからご本人に選んで頂いたものなんです。映画の役柄をイメージしたとのこと。こんな、素敵なお洋服が沢山ありますので、公園へのお散歩の前にも、後にも、ぜひ一度足を運んでみてください。



チェリーのタルト

チェリーの甘酸っぱさを残して仕上げた、さっぱり且つべろりと楽しめるタルトです。

●チェリーのタルト ¥700



●shirt:Houttuynia cordata ¥16,000-+tax ●skirk:PULETTE ¥25,000-+tax

吉祥寺

だけが

住みたい

街でした

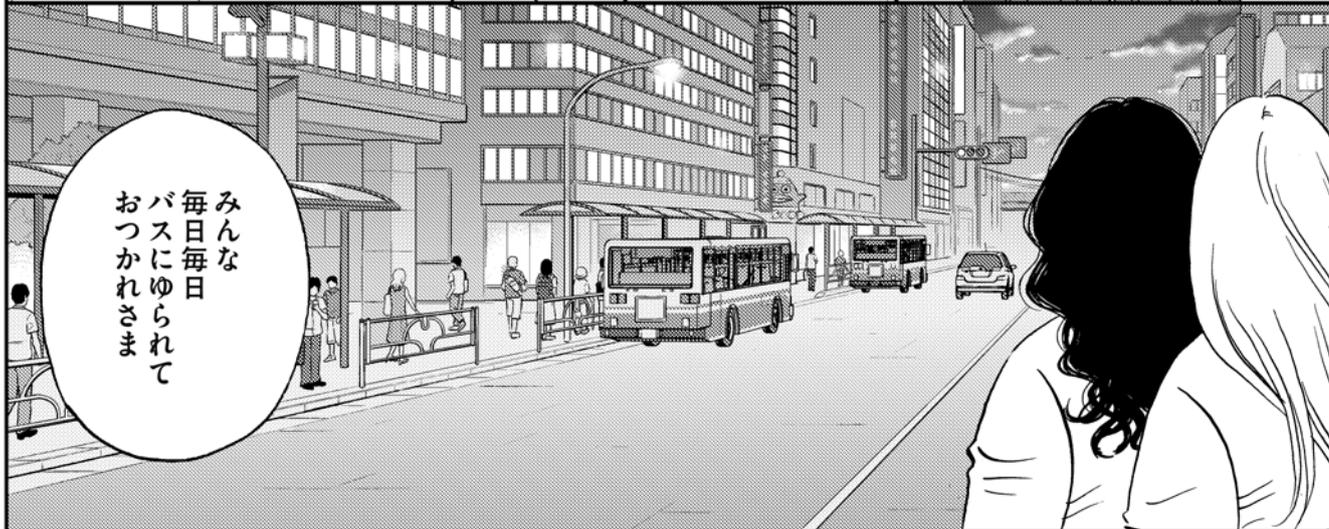
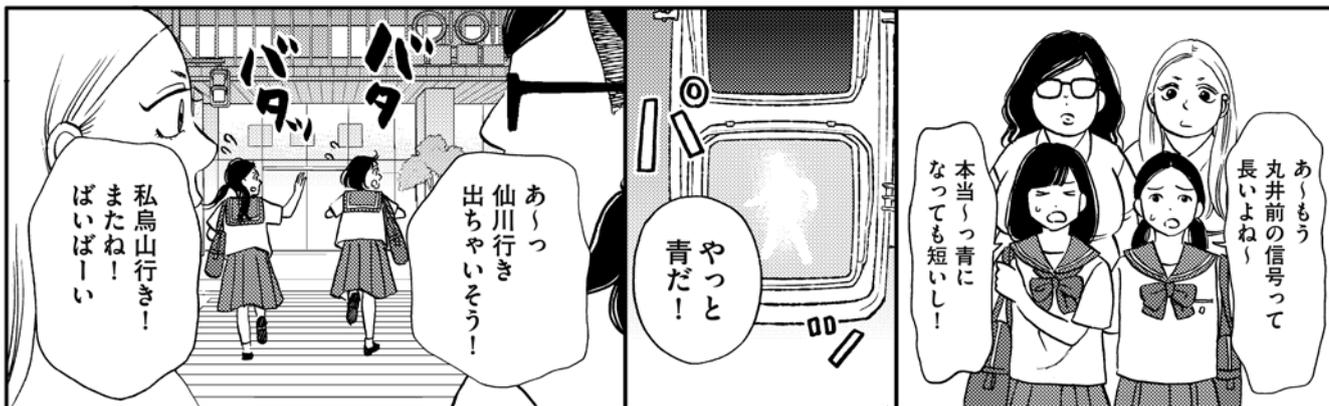
マキヒロチ

2

マキヒロチ | 冒頭に吉祥寺バウスシアターの閉館の話題が登場するコミック『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』の作者。吉祥寺で不動産業を営むにもかかわらず、吉祥寺に住まいを求めてやってくる客たちを吉祥寺の外へと案内する女性を主人公とするこの作品は、そこにある吉祥寺への裏返しへの愛とともに多くの読者の心をとらえ、現在も「ヤングマガジン サード」誌に連載中。その他『いつかティファニーで朝食を』(新潮社)『創太郎の出張ぼっちめし』(新潮社)などがある。

logo design:siun | 小酒井祥悟が2013年4月に設立。「TO magazine」や「& premium」のwebsiteなどをデザイン。

吉祥寺に馴染みのある方にとって、吉祥寺を思い出す時にパッと浮かぶ風景ってどこなのでしょう？ 井の頭公園？ ハモニカ横丁？ サンロード？ 前回、吉祥寺がどんどんチェーン店が増えてどこにでもあるような街になっていくのが寂しいと書いたのですが、今挙げたような変わらない風景も沢山あります。その中で私がパッと思い浮かべる風景は、南口のバス乗り場です。丸井の前の井の頭通り沿いにズラッと停留所が並んでいて、どの停留所もバスを待つ人々が列を作っています。南口からは、仙川駅や調布駅や武蔵境駅などに向かうバスが到着します。大体のバスが下連雀までは停まるのでそれまでに降りる人は行き先を気にせず先に着いたバスに素早く駆け込んで行きます。私が若い頃住んでいたのは吉祥寺と千歳烏山の中間だったので、吉祥寺から家に帰るときは千歳烏山駅行きのバスを利用していました。バスは10分に1本ぐらいの頻度だったので少ない本数ではなかったのですが、寒さに弱い私は冬の10分は永遠のような長さを感じることも。中学時代、立川の塾に通っていて帰宅が夜だった私は、当時烏山行きのバス停の前にあった今川焼き屋さん(今はもうない)で、冬場はホッカイロ代わりに今川焼きを買って停留所の列に向かいました。今川焼きが少し冷めてきたら食べて、受験のことや大好きな漫画のことや大好きなミュージシャンのことを考えながらバスを待っていました。もう離れた場所で暮らしてる私は、たまに吉祥寺に行って千歳烏山行きのバス停を見ると若かった頃の自分を思い出したような気持ちになってせつなくなります。そんな思い出もあったりして私は南口のバス乗り場の風景がとても好きです。家に帰って人々をそれぞれ物語を想像しながら眺めるのが好きです。ずっとずっと残っていて欲しい風景です。



IN CINEMA, IN KICHIJOJI

vol.2



映画の中に出てきた吉祥寺。吉祥寺で撮影された映画。そんな映画の記憶を色々な人に語ってもらおうというリレー企画。今回は現在は井手健介と母船として活躍中、そして映画『PARKS パークス』にもミュージシャン役で出演された井手健介さんの登場です。閉館するまでバウスシアターの社員でもあった井手さんに、バウスと映画の思い出を語ってもらいました。

井手健介 | ミュージシャン

『ハッスル&フロウ』／毛皮のマリーズPV『ビューティフル』 そしてバウスシアターの終わりから生まれたアルバム

バウスシアターに入ったのは大学卒業してすぐで、それまで就活とか何もしてなかったんですが、たまたま大学の映画研究会の先輩だった武川さんがバウスで働いていて、誘われたんですよ。何も考えず、面白そうだなというただそれだけで、誘われるまま、入ったんです。それまでは大学が埼玉の方だったので、バウスで映画観たことはなかったと思います。

印象に残っているのは、真夜中の湾祭りですね。2009年の夏。湯浅湾のライブに大友良英さんがゲストで、あといいしんじさんがステージ上で小説を書いていく「その場小説」の爆音ヴァージョンや、今では「アナログバカー代」という名称でやっている爆音レコード鑑賞会とかやったんです。

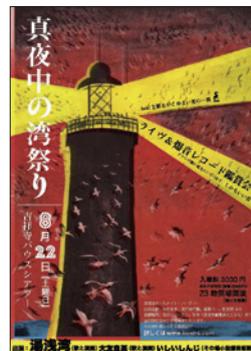
バウスでも通常の興行の時だとさすがに普通にさっさとやるんですが、あの時はそういった社会性というか、社会一般の決まりごとみたいなものがすべて取っ払われた空間になっていて。ロビーではなぎ食堂が渋谷からの

出張営業で餃子を焼いていて、その匂いが充満して、もうモクモクしていて(笑)。ロビーの階段の凄い狭いスペースでは円盤の田口史人さんがレコードを売っていたり、虹釜太郎さんがカクテルを売っていたり、もうあちこちにグダッとした人たちがいて、その光景が忘れられないです。

で、その時に湯浅湾が大友さんと一緒に「みみず」を演奏して、その時僕は前の方の右側の扉のところで大興奮して見ていたんですが、その向かい側の扉のところに無茶苦茶に酔っ払ったなぎ食堂の小田さんがニコニコ笑いながら踊っていて、それを見た時に本当に、ああこういう大人になりたいと思ったんですよ。

それから、オールナイトで『キル・ビル』をやって、その前に(『キル・ビル』に出演してライブ演奏をしている)5678'sがライブをするという企画。あれは世界中でも、バウスでしかできない企画だったと思うし、それを考えると今でも爽快です。単に5678'sがライブをするだけではなく、単に爆音で『キル・ビル』を上映するだけでなく、そのふたつが繋がっているんなものが混じり合った場になっていく。あんなことはバウスでないとできなかつたと思います。

バウスで撮影した映画でよく憶えているのは、沖縄映画祭のために作った空族の中編『チェンライの娘』(富田克也監督/2012年)と、『BELLRING少女ハートの6次元ギャラクシー』(継田淳監督/2014年)ですね。あと山下敦弘監督の短編を楽屋で撮ったことがあって、あれは、確か篠崎誠さんの企画したシリーズで「刑事まつり」の中の『汁刑事』(2003年/『最も危険な刑事まつり』の1本として上映。のちに『その男狂暴に突き』に改編)というのだったと思います。あとはバンドの毛皮のマリーズのPVを撮りました。これは僕と武川さんだけが



●真夜中の湾祭りのチラシ

2009年8月22日に行われた「真夜中の湾祭り」のチラシ。



●映画『キル・ビル』とバンドの共演

クエンティン・タランティーノ監督の2003年作品。かつてのボス、ビルのためにすべてを失った女殺人者の復讐の旅の物語。主人公が訪れた日本、巨大割烹での乱闘シーンでライブをするのが5678's。80年代から活動続けるガールズ・ロックンロール・バンドである。第5回爆音映画祭のオールナイト企画で映画とバンドとの共演が実現した。掲載写真は「第5回爆音映画祭」のチラシ。



●PV 毛皮のマリーズ「ビューティフル」

2008年12月リリース。パウスシアター1のステージだけではなく、映写室裏の廊下など、今となっては貴重な場所が映されている。YouTube「<https://youtu.be/iXCybt9Tvr1>」にて閲覧できる。

知っていて、あとの人たちには内緒でやりました。今だから言えますが(笑)。あれは楽しかったですね。レイト上映が終わった後から朝までかけて撮りました。でもあとから社内でバレそうになって、本当にヒヤヒヤしましたが、「ビューティフル」というタイトルの曲ですね。YouTubeで見ることができます。

パウスで上映した作品の中で一番衝撃だったのは、マイク・リーの『秘密と嘘』(1996年)ですね。椅子から立ち上がれないほど感動した覚えがあります。映画ってすごいって思いました。自分とは違う人の人生をこうやって体験することができるって、他にないじゃないですか。あの映画はそういう体験の最初だったと思います。

あとは爆音で見た『ハッスル＆フロウ』(クレイグ・ブルューアー監督/2005年)ですね。今でも一番好きな映画はなんですかと質問されたら、この映画を出します。最高でした。パウスでやっていた爆音は単にいい音でやるとか、すごくいい機材を使って解像度の高い音を出してどうですか、というようなものではなくて、樋口さんのロック衝動みたいなものが映画の中のエモーションとうまく結びついて、奇跡的な瞬間が生まれる。あの感じ。一気に盛り上がるんですけど、『ハッスル＆フロウ』の上映って、そういう奇跡のような上映だったように思うんですよ。ここでしか生まれることのない感情が湧き上がってくるんです。



●映画『ハッスル&フロウ』爆音上映

『ターザン:REBORN』のクレイグ・ブリュワー監督作品。一度は挫折したミュージシャンへの道を再び歩み始める男の、ヒップホップ映画。アイザック・ヘイズ、リュダクリスも出演。爆音上映は2007年9月1日(土)のオールナイトで、『ドリームガールズ』『ソウル・サヴァイヴァー』『シャフト』とともに上映された。掲載写真は当時のboidペーパー。

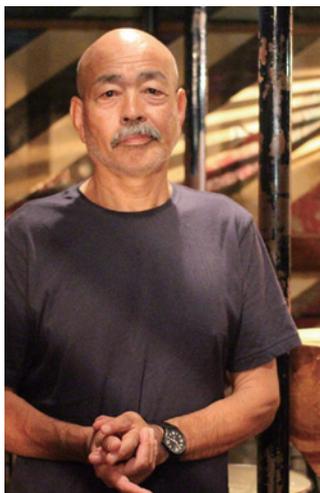


●井手健介と母船

山本達久、石橋英子、柴田聡子などのバックアップをえて、2015年8月にP-VINEよりリリースされたデビューアルバム。

そんな体験を積みながら、バンドも結成して去年はアルバム『井手健介と母船』も出しました。バウスが終わる時にありがたいことにちゃんと退職金が出て、一時的ではあるけれど、お金と時間が一気にできたので(笑)、それで作ったんですよ。山本達久くんが、じゃあやろう、と声をかかけてくれて、その気になった。で、いろいろメンバーを集めて、小淵沢まで行って。ただ、これが完成、という状態がないような録音だったんですね。僕にもどういう形が完成なのか見えていなくて。それで何回もスタジオに入って、その度にお金を出して、そして金がなくなったところで終わり。退職金がなくなったところで録音が終わりました(笑)。だからこのアルバムは、バウスが閉館にならなかつたら、生まれていなかったですね。物理的にも精神的にも、バウスの終わりから生まれたアルバムです。今でも、もしバウスが続いていて今とは全く別の人生が続いていたらと思うとぞっとします。

井手健介(い で・けんすけ) | 1984年生まれ 宮崎県出身。吉祥寺バウスシアターのスタッフとして爆音映画祭等の運営に関わる傍ら音楽活動を始める。2012年より井手健介と母船のライブ活動を開始。バウスシアター閉館後に製作を始めた1stアルバム『井手健介と母船』を2015年にリリース。映画『PARKS パークス』には、主人公のバンドのギタリストとして出演した。



第二回

MANDA-LA2店長
中野直志インタビュー

吉祥寺の裏方たち

1971年に浦和に開店し、1974年に吉祥寺南口パークロード沿いに移転した「曼荼羅」は、その後南口末広通りに誕生した2号店「MANDA-LA2」や北口ヨドバシ裏の「スターパインズカフェ」とともに、40年以上にわたって吉祥寺の音楽シーンを支えてきたライブハウス。草創期からスタッフとして関わり、現在はMANDA-LA2の店長を務める中野直志さんに、曼荼羅グループの歴史、そして現在についてお話を伺いました。



——吉祥寺最古のライブハウス曼荼羅の、これまでの歴史を教えてください。

中野: 最初の曼荼羅は1971年、浦和に開店しました。ライブハウスはもちろん、若者が集まれる場所自体がなかった時代です。お酒が飲めるのはスナックだけ、生で音楽が聴けるのは市民ホールくらい。そこで、曼荼羅のオーナーをはじめ、僕より10歳くらい上の世代が、自前の場所を作り始めた。場所ができるといろんなやつらが集まってきて、自然に音楽が演奏されるようになった。浦和の店はジャズ喫茶からスタートしました。店にくる若いやつが「僕、スピーカー作れます」と言い出して作っちゃったので、防音にしてジャズをかけ始めた。僕は大阪から出てきてぶらぶらしていた21歳のころ、音楽好きを買われてレコード係として雇われました。そのうちせつかく大きな音が出せるんだし、ということでライブもやるようになった。店のすぐ横に生バンドのキャバレーがあって、そのミュージシャンたちが「キャバレーの伴奏だけでなく、自分達の音楽を演奏したい」というので



出演してもらったのが始まりです。この浦和の1号店はオープンして3年目に火事で焼けてしまい、オーナーが生まれも育ちも吉祥寺だった縁もあって、1974年に吉祥寺南口パークロードの現在の場所に移転しました。浦和から出演していたカルメン・マキ、亀淵友香、山下洋輔、浅川マキ達も引き続き吉祥寺で演奏してくれて、吉祥寺でのベースが出来ました。

——そのころは来日ミュージシャンの公演も行われていたとか。

中野: ええ、スティーブ・レイシーとかね。昔はライブ会場も少なかったし、世の中がややこしくなかったの、そういうことができたんですね。ただ、最初のうちは毎晩ブッキングするのは難しく、月に10公演くらいでした。やがて地元のミュージシャンも増え、連日ライブができるようになっていきました。バンドブームのはしりというか、みんながやっと自分で楽器を持てるようになった時代だったんですね。70年代末から80年代にかけてはロックが

中心でした。いつのまにかフォーク系はぐわらん堂、ロック系は曼荼羅という感じで、吉祥寺の中で棲み分けるようになって。

——曼荼羅を登竜門にデビューしたミュージシャンにはどんな人たちが?

中野: いちばん記憶に残っているのは、RCサクセションですね。70年代の終わり、彼らがメジャーになる直前、小編成からバンド編成に変わった時期に、最初は日曜の昼の部に出演して、その後、演奏するたびにお客が増えていき、音楽も刺激的になっていきました。それから「たま」。まったく無名のときに曼荼羅に出て、面白いから毎月やればと提案したんです。見る見る観客が増えて曼荼羅では手狭になったころ、ちょうど87年にMANDA-LA2がオープンしたので、そっちに移動してもらいました。ちょうど「イカ天」の時期で、毎回ものすごい数のお客が押し寄せました。

——その10年後の97年には、スターパインズ・カフェがオープンしますね。

中野: それまでの店は吉祥寺の南口でしたが、70年代の南口は闇市のなごりと平屋の商店しかなくて、曼荼羅のビルが最初のビルみたいなものでした。周辺は住宅街で公園があって、のんび





「PARKS パークス」の撮影風景。スターパインズ・カフェにて。写真：数下雷太

りしていました。対して北口は、もうサンロードも近鉄もあって、商業都市に変化しつつありました。だから90年代末にスターパインズ・カフェを線路の北側に出店したときは「おお、ついに北口に進出か」と感慨がありましたね。

——現在吉祥寺にある3店舗のコンセプトの違いは？

中野：明確に決めたわけじゃないんですけど、場所の雰囲気、出演者と客層が自然に決まってきました。それぞれの店にブックイング担当がいるので、そのセンスや人脈の違いもある。曼荼羅は意図的にオールラウンドで、飛び入り参加できる企画もやっています。スターパインズ・カフェは比較的とんがったアーティストが多い。あそこは広いので、ダンスや芝居など、仕込んだパフォーマンスもできます。僕が店長を務めるMANDA-LA2は、昔から

知っているミュージシャンがどうしても多くなる。高田渡さんは亡くなってしまいましたが、なぎら健壺さんはもう30年以上、毎月最終土曜日に演奏してくれていますし、元「たま」の知久寿焼くんもここをベースにしています。

——観客の年齢層もかなり大人なんですか？

中野：40代50代は当たり前です。もちろん20代30代もいますが。中央線文化が好きで、吉祥寺のことがどこかに引っかかってる人たちですね。いまライブハウスに来るお客さんは、世の中で大量に流通する音楽とは別の何かを探している。そういう観客がいるから店の存在価値があると思っています。日々の積み重ねの中で、面白い演奏者と出会い彼等と一緒に音楽を創る気持ちを大事に続けてゆければ良いかなと思っています。

取材／構成：松浦泉

お店情報

曼荼羅

住所：武蔵野市吉祥寺南町1-5-2 ☎0422-48-5003

MANDA-LA2

住所：武蔵野市吉祥寺南町2丁目6-6 第18通南ビルB1F ☎0422-42-1579

スターパインズ・カフェ

住所：武蔵野市吉祥寺本町1-20-16 ☎0422-23-2251

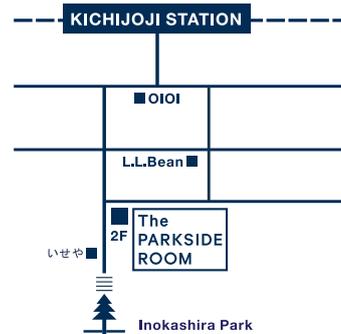
The PARKSIDE ROOM



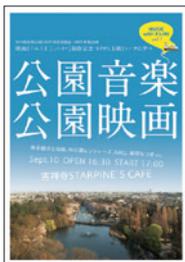
Shop Information



吉祥寺駅徒歩 5 分、井の頭公園近くの
メガネ・サングラスを中心としたセレクトショップ。
「単焦点レンズ」「伊達メガネ用レンズ」
「遠近両用レンズ」「ブルーカットレンズ」など多様
なレンズを取り揃えております。映画『PARKS』
にメガネの衣装協力をしています。



180・0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 1-17-1 2F
T/F 0422・41・8978 E-MAIL info@tpr.jp
URL <http://www.tpr.jp> OPEN 12:00 - 21:00 水曜日定休



井の頭恩賜公園100年実行委員会 100年事業企画

映画『PARKS』制作記念イベント「MUSIC with FILMS」vol.1

サントラ参加ミュージシャンを迎えて吉祥寺STARPINE'S CAFÉにて！
各バンドお気に入りの映画音楽を必ず1曲はカバーして演奏するというお楽しみ企画とともに送る、ライブと映画とトークの夕べ。

- ★ライブ演奏・・・井手健介と母船、井の頭レンジャーズ、NRQ
- ★音楽×映画トークショー・・・井手健介、高木壮太(井の頭レンジャーズプロデューサー)、牧野琢磨(NRQ)、瀬田なつき(『PARKS』監督)、樋口泰人(boid) ★瀬田なつき作品の上映あり



井の頭公園
園内放送に注目!

井の頭公園内で日々流れる園内放送。さまざまな注意事項が読み上げられるのですが、なんと、5月半ばからはバンド「相対性理論」のやくしまるえつこさんによるアナウンスが流されているんです。そのバックに流れるのは相対性理論のニューアルバム収録の「弁天様はスピリチュア」。これはバウスシアター閉館後に、相対性理論がバウスをスタジオ代わりにして録音した音源が元になった曲で、当然井の頭公園の弁天様をイメージしながら作られた曲。毎日10時と12時と16時。弁天様あたりではとてもよく聞こえます。歌と現実とが溶け合った、まさにスピリチュアルな空間が出現します。是非一度お試しあれ。

『PARKS』
配布のお願い

『PARKS』は2017年5月まで、隔月での発行予定の期間限定マガジンです。同名の映画とともに生まれ、ともに語り、ともに成長していきます。この『PARKS』を配置、

配布していただける店舗やスペースを募集しています。ご協力願える方、下記までご連絡ください。

✉ parks100@boid-s.com

PARKS パークス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ

2017年4月 テアトル新宿他にて全国公開

製作: 本田プロモーション BAUS 製作プロダクション: オフィス・シロウス
配給: boid 宣伝: VALERIA、マーメイドフィルム ©本田プロモーション BAUS

parks100.jp [fb.com/parks100jp](https://www.facebook.com/parks100jp) [@parks100jp](https://twitter.com/parks100jp)

フリーペーパー『PARKS』2号

2016年8月30日発行

編集 岩井秀世、樋口泰人 (boid)
編集協力 松浦泉、伊藤健太郎 (STAR PINE'S CAFE)
倉茂透、嶋崎周治 (Continuer inc.)
中臣美香 (coromo-cya-ya)、松田広子
小倉聖子 (VALERIA)、田中有紀 (boid)

デザイン 中野香

発行 boid www.boid-s.com

東京都新宿区住吉町1-11 OSKビル602 ☎ 03-3356-4003

